

国際ドイツ語オリンピックに参加して (F. Ogasawara)[J]

今夏、日本が猛暑に見舞われていたちょうど7月終わりから2週間弱、豪華なバロック建築で有名なドレーズデンで「第5回国際ドイツ語オリンピック」の幕が開いた。40カ国119名の参加者がA2,B2,C1のレベルに分かれ個人部門（各レベル3名ずつ入賞）、団体部門（5名ひと組で各レベル1チームずつ入賞）でのべ24の賞を求めて競技したが、日本人はA2個人部門3位、B2団体部門、C1団体部門と3名とも受賞に輝いた。3名の受賞は日本のみで、北京五輪より一足早く日本が実質の金メダルを獲得しようとは、引率者の私ですら予想だにしていなかった。そして参加者が全員、程度の差こそあれ国代表の自負とプレッシャーを抱えて現地入りした様を目の当たりにし、ドイツ語の世界で類まれな大会だと感じた。

数学オリンピックをはじめ様々なオリンピックを冠した大会があるが、ドイツ語オリンピックのことは知られていない。日本からは今年が初参加だったこともあり、ドイツ語教育関係者にもそれほど周知されていないのが現状である。そのため、おそらくは先生方の中にも国内1次予選（書類審査、エッセイ）で勝ち残った10名（大学生5名、高校生5名）が実は受け持ちの学生だったということを知らないという方もいらっしゃるのではないだろうか。最終予選の筆記試験およびプレゼンテーション形式による口述試験、日本語での面接をクリアした3名の大学生はもとより、この大会はドイツ語学習者にとって今後大いに励みになるはずであるから、ぜひ多方面で学生に報告していただけたらと願う。

ドレーズデンでは強豪がひしめく中、全員受賞という快挙は日本が誇れる結果だが、それよりも119名もの五大陸から集結した若者がドイツ語だけで夜遅くまで語り合い、笑い合い、喧嘩し合い・・・異文化が混ざり合う中で寝起きを共にし、様々な感情や考えをおそらく簡単には処理しきれないほど自己の中に溢れ出せたことが彼らにとってかけがえのないメダルとなったことは間違いない。この多感な年頃にアジアやヨーロッパ圏だけでなく、アフリカや南米、珍しいところではナミビアやアイスランド、キルギスタンといった国々からの、国内予選を勝ち抜いてきた同年代のいわば「ドイツ語エリート」が一堂に会し、コミュニケーションできる機会是他にない。やる気のある生徒、好奇心旺盛の学生をどんどん育て、参加させてみてはどうだろうか。ドイツ語スピーチコンテストと並び、本当にチャレンジし甲斐のある大会だとお勧めする。

また、大会への取り組みが国によりかなり温度差があるのは、学習歴に比例し国内予選応募者数に差異が生じるので仕方がないが、初参加の日本でもメディアにアピールする価値があったと反省する。「日本代表」として参加し、しかも結果を残せた「国際ドイツ語オリンピック」の存在がメディアにより一般的に認知されればドイツ語人気に火が点くの

ではないかと考えるのは突飛すぎるかもしれない。しかし少なくとも言語には珍しいこのオリンピックに名実とも価値があり、日本でも社会的にもっと認められてよいと心から信じている。そのためにもまず先生方による情報提供が第一歩となるためお願いしたい。

引率者は並行して行われた教員アカデミーに参加したが、こちらも非常に有意義だった。写真にあるように、引率者も恥ずかしながらドイツ語教育貢献者として壇上で表彰があった。尚、国際ドイツ語オリンピックに関する詳細は、来年のドイツ語教育部会会報『ドイツ語教育』14でご報告させていただくことになっている。

小笠原 藤子（桜美林大学・慶応義塾湘南藤沢校高等部非常勤講師）

0056

作成日 : 2008/11/12